

氏 名	羽 田 真 也
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（歴史学）
学 位 記 番 号	甲文第96号（文部科学省への報告番号甲第356号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2011年3月3日
学 位 論 文 題 目	近世村落における社会秩序の確立と展開 —泉州泉郡池田谷・松尾谷を対象として—
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授 志 村 洋 （副査）教 授 西 山 克 名誉教授 三 浦 俊 明

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、地域史の視角に基づき、泉州泉郡池田谷・松尾谷に位置する村むらを題材として、その近世における社会構造を明らかにし、そのうえで村の社会秩序の確立と展開を把握することを課題としている。この前提には、近年の日本近世史を中心とした地域史研究の進展がある。筆者は、その到達点を、第一に、「市民の生活世界としての地域」の再生・創造という現代的課題を念頭に置きながら、近世における地域のありようを実態的に把握していくことが意図されている点、第二に、その分析方法として、土地所有主体たる小農が形成する共同体＝村社会を本源的な地域（生活世界）と捉え、村ごとに固有な社会のあり方を重視しながら、その社会構造を精緻に解明していくこと、さらには、村社会とは異質な「資本」や労働力の展開、それと村社会との相克の過程から歴史展開を把握していくことが求められている点などに見出している。本論文では、こうした理解のうえにたち、地域史研究の実践が進められるとともに、地域史のさらなる発展が図られている。論文全体の構成は、序章を先頭に5章で構成され、各章が独立した小論文の体裁をとっている。

第1章「近世の万町村と伏屋長左衛門家 —『俗邑録』を題材として—」は、『俗邑録』という史料を用いて、池田谷の榎尾川左岸に所在する万町村の社会構造と庄屋伏屋長左衛門家の展開を検討したものである。『俗邑録』は18世紀末から19世紀半ばに伏屋家が編纂した史料集であり、大永3年（1523）から文久2年（1862）の万町村に関する文書などが収載されている。この『俗邑録』から、山の用益をめぐる秩序の確立、山の開発の展開、座の秩序の確立、伏屋家が庄屋を独占する体制の確立といった17世紀の動向が抽出され、万町村の17世紀が村社会の変動と確立の時期であったことなどが明らかにされている。また、伏屋家の政治的・経済的・文化的諸活動が万町村や池田谷をこえるものであったにもかかわらず、『俗邑録』には万町村、および山の用益や水利を通して深い関係にある榎尾川左岸3村（万町村・浦田村・鍛冶屋村）に関する史料しか掲載されていない点を踏まえ、伏屋家や万町村百姓にとっては、万町村の枠組みこそが実態を伴った一次的な生活世界であり、万町村・浦田村・鍛冶屋村の枠組みは二次的な生活世界と把握できることが指摘されている。

第2章「一七世紀の唐国村の村落秩序」は、松尾谷北部に所在する唐国村における17世紀の社会秩序について、庄屋岡家に残された史料などを用いて検討したものである。唐国村の村社会が、立会山（唐国村・内田村立会山など）での用益、溜池に依拠した水利秩序、岡家が家職として庄屋を勤める村運営、本座と南座からなる座（天神講）などを主要な要素としながら存立していたこと、それらはいずれも17世紀にそ

の秩序を確立させていく方向にあり、それを通して唐国村の近世的社会秩序全体が整えられていったことが明らかにされている。

第3章「唐国村・内田村立会山における用益の展開と山論」は、唐国村の岡家文書、唐国村に隣接する内田村の庄屋河野家の文書などを用いて、唐国村・内田村立会山（名古山）をめぐる山直谷の村むら（山直中村、三田村）との山論の分析から、山の用益の展開を見通そうとしたものである。そして、17世紀後半の延宝検地で立会山の領域（境界）が確定したこと、しかし18世紀には山直中村や三田村の用益が境界をこえて立会山内へ進入し、例えば唐国村・内田村の下草の採取と山直中村の立木の伐採との併存というように、用益が重層化していったこと、19世紀になると用益の深化や新たな開発の展開などにより、山論が頻発するようになったこと、その際には延宝検地で確定した枠組みが大きな意味をもったことなどが明らかにされている。

第4章「一七世紀・泉州泉州宮里地域における寺の成立と村」は、国分村庄屋三浦家に残された史料を用いて、池田谷南部の宮里3村（国分村・平井村・黒石村）における村落寺院の成立過程を、境内地をめぐる争論の分析から明らかにしたものである。そして、当初は、非常に不安定で、流動的な状況にあった寺や住職が、延宝検地や堺奉行による寺社改、さらには境内地争論を通して自立化・安定化していく様子が明らかにされている。あわせて、元禄4年（1691）の「古跡」（寛永8年以前から存立する寺社）の把握を目的とした寺社改によって、新たな「古跡」が一定数創出された可能性が高いことも指摘されている。

以上のような各章での、それぞれの村に即した分析を踏まえ、さらに全体を貫く論点として、次の2点が指摘されている。

ひとつは、村の社会秩序の確立とその展開についてである。17世紀に村の社会秩序が確立する画期があること、それは中世以来の展開をベースとしながら、法的枠組み（検地、裁許、諸改など）と社会的実態との緊張関係の中で進行すること、また社会秩序の確立は多様なレベルの法（幕藩領主による法、村落間の取り決め、村落内の取り決めなど）の重なりあいとして実現されること、そうした秩序は不変・静態的に維持されるものではなく、常に秩序をこえた新たな実態が生み出されてくるのであるが、それも17世紀に確立した枠組みと無縁ではありえず、両者の緊張関係の中で展開していくこと（争論に際して17世紀に確立した枠組みが浮上し、それが大きな意味をもつなど）などが指摘されている。

もうひとつは、地域社会の分節的把握である。第1章と第4章での成果や先行研究を踏まえ、地理的特徴と古代～中世の開発の展開とを背景とした、池田谷における4つの地域的まとまりの形成を重視し、その総体として池田谷の歴史展開（全体史）を把握すべきであること、言い換えれば、村（＝一次的生活世界）—4つの地域（＝二次的生活世界）—池田谷という形で重層的に地域の歴史を理解すべきであることが指摘されている。これにより、個々の村社会の固有性を重視しつつ、より広域の地域社会を如何に把握していくのかという、地域史の方法が示されているのである。

論文審査結果の要旨

本論文は泉州泉州郡の特定地域に沈潜した研究であるが、氏の修士論文以来の研究テーマは播州姫路藩の大庄屋制である。著者はこれまで姫路藩大庄屋制に関する論文を査読学会誌に複数発表してきたにもかかわらず、今回の博士論文においてはそれらを割愛している。氏は、1990年代後半から一部の学会で提唱されるようになった新たな自治体史型の地域研究方法に強い影響を受け、それへの傾倒の結果、今回のような章節構成がとられることになった。

本論文は、その新たな研究潮流を独自に解釈しなおしたものであるが、特筆すべきことは、近世前期における村落社会秩序の形成過程を、幕藩権力や村役人といった支配者側からの視点ではなく、用水や山林、

宮座などといった一般村民の生活実態レベルから明らかにしている点である。戦後近世史研究においては、長い間、佐々木潤之介氏・深谷克巳氏らの村請制村落論の影響のもと、戦国期末から近世初頭に、幕藩権力の新たな政策によって近世的な村落共同体が創出されることが強調されてきた。本論文では、そうした近世的な支配の枠組みを政治的表層として捉え、かわりに実態的な生活世界を措定し、その特徴を村ごとに異なる農業生産条件や耕地開発のありようから明らかにした。氏においては、村むらの社会秩序は住民自らによって主体的に形成されるものであり、一村として同じものがない、歴史的個性にあふれる地域秩序として描かれることになった。

また、本論文で見逃してはならないことに、現地を実際に踏査して得られた野外調査の成果が背景に横たわっていることがあげられる。氏は、自らの職場である和泉市教育委員会において、当該地域の現地調査を行い、近世の絵図資料も用いることで、今日の地形図には記載されないような小溜池や用水体系を詳細に解明している。こうした野外調査は一個人では実現困難であり、実際に、氏の作業も市史編さん事業の一環として行われてきた。しかし、その成果を文献資料の分析と有機的に結びつけ、近世前期の村落秩序を立体的に描き出した点に、氏の優れた研究能力をうかがうことができる。

なお、本論文の特徴をより正確に理解するには、町田哲氏の著書『近世和泉の地域社会構造』との関係について触れる必要がある。町田書は、本論文とほぼ同じ課題意識に立脚して当地域の社会構造を詳細に明らかにしたものであり、羽田氏も、町田書からきわめて多くの事実を学んでいる。しかし本論文では、町田書が十分に論じ得なかった谷全体の分節的把握を、開発という限定された視角ではあるものの、行っており、重要である。

従来、17世紀段階における十数か村程度の地域社会の内部実態については、実証的研究が乏しく、旧後北条氏領国の「領」研究など、関東地方を中心にしたいくつかの研究があるにすぎなかった。それらの研究では、多くの場合、近世中期に成立する新たな地域運営システムに注目するあまり、地域内部の構造分析を十分に行ってこなかった。これに対して、本論文では、分節的地域把握法によって、池田谷地域を、一次的な生活世界である村と、二次的な生活世界である小「地域」、さらにはそれらを包含する谷といった、三層構造から社会として把握し、個々に異なる開発のありようを跡づけた。このことにより、東日本農村などの事例とは異なる、中世からの既開発地が多い、畿内農村型の開発とでもいうべき実態が明らかとなった。

以上のように、本論文は17世紀の地域社会研究として優れた成果をあげている。しかし多くの課題もまた残されている。たとえば氏は、17世紀半ばから17世紀末に地域秩序の大きな画期を見いだしているが、その前提として考慮すべき兵農分離や小農自立の実態などが論理に組み込まれていない。また、延宝期の幕領検地や堺奉行による元禄の寺社改めが当地の社会に大きな影響を与えたことを認めつつも、その歴史的意味を十分に論じ得ていない。これらの欠点は、幕藩権力による支配や政策を、村むらにとっての「政治的表層」として、過小評価して捉えたために生じたものといえる。

しかしこのような問題点は、決して本論文の意義を大きく減じるものではない。そもそも羽田氏は、以前の姫路藩領の研究において藩権力からの規定性を十分に意識した研究を行ってきた。本論文で明らかになった欠点は、今後他地域の研究と比較・総合化されることによって、早晚克服されることであろう。

審査委員3名は本年2月12日に口頭試問を行い、その結果と上記論文審査結果から、羽田真也氏が課程博士（歴史学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判断したことをここに報告する。